

龜谷 行著
和漢脩身訓
二

八八

得志
與古
不
同
心
者
不
入

| | |
|-------|----|
| 修 | 號 |
| 第 五 | |
| 共 拾 冊 | |
| 年 月 日 | 備付 |

送

共
拾

| |
|-------|
| K1101 |
| 1707 |
| 2 |

和漢脩身訓卷二

龜谷行著

第一章

○人の天地ふ生る。父母の外。君恩もつとも大あり。

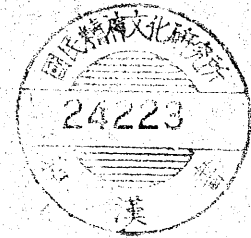
習是編

和漢脩身訓

卷二

一

光風社發行



○君よ事るハ。親よ事るガ
如く。官長よ事るハ。兄よ事
る可如し。呂氏童蒙訓

○親よ事るハ孝ハ。君よ事
つて忠とあり。兄よ事るの
敬ハ。長よ事つて順とある。

故小忠臣ハ孝子の門又出
づと云。熊澤孝經
小解

○心を盡し。上よ奉むる。之
を忠と謂ふ。書經
疏

○君よ仕つてハ。忠を盡し。
私を忘る。我身を顧ること

勿き。

貝原初學訓

第二章

○人の人とする。全く禮不在り。威儀あり。法度あまき。人必を之を尊敬童子以習。

○長者又道不遭ひ。我車馬

小乗らば。必を下りて。長者の過ぐるを待同上つ。

○長者問ふことあらば。對ふる。小實を以てし。敢て欺ま同上い同上つ同上む同上ら同上ば同上。

○長者教誡をること有ら

三
 首を垂れて之を聴く。之
 妄又自ら議論を爲さず。之
 朱子童
 蒙須知
 徐行して長者不後る。之
 を弟と謂ひ。疾行して長者
 不先よつ。之を不弟と謂ふ。

孟子

○ 門戸を出入
 し。及び席之即
 ち。飲食を食ふと
 と。必ち長者小
 後る。
 貝原童
 子訓



朱子

○耳を傾け。人の密事を聴くこと勿き。あがり目ふ人を見ること勿き。貝原五常訓

第三章

○年方小幼。血氣未壯。おらば。大人の教戒お依り。以

て徳性を養ひ成るる。〇謙とハ。自ら卑下して誇

らざるあり。人お下りて問ふことを好む。人の諫を聞きて。我が過を改む。以て智を開き。善お進む。〇貝原大和俗訓

○矜といふ不こる也。自らは是
として。人ふ求め以。才智日
よ長トて。不善愈進む。尤ト戒
むト。同上
○恕といふ。我が心を推し。以
て人の心をはらる也。我の

好む所ハ人も之を好む。宜
く人々施をト。同上
○己の心を盡を忠とす。
己を推志。人々及を恕と
為ト。朱子語
○信ハ心よほことある也。

中庸 卷之五 六

心誠何まきハ。言行の上りあら
らむる。五常訓

○人の心信實あるハ。萬事の
の基ふして。人よ交る能道
あり。同上

○若信あ々礼バ。萬事都て

偽りあり。人よ交りて。何如
ぞ善まことを得ん。同上

○孝悌忠信ハ。身を立つる
の大本。禮義廉耻ハ。己を行
ふの先務あり。省心
雜言
○善哉行ひて。人の知るこ

和漢傳言 卷一 光風社藏本

とを求めば。之を陰徳と謂ふ。古人曰く。陰徳ハ耳乃鳴ガ如く。我ひとり知りて。人知らばと。大和格詔
○人の飢うるを救ひ。人の病めるをよむ。人の害を

除き。人の利益を興す。皆陰徳あり。同上
○人の善を譽め。人の過をりくとし。人の中を和らげ。妄よ人を怨まば。皆陰徳あり。

同上

和漢傳言 卷一 光風社藏本

○道を修め。橋を造り。故は
として。禽獸蟲魚を害せぬ。
皆陰徳あり。同上
○人を侮らば。人を妨げぬ。
善を去り。めて。惡をいさむ。
之は陰徳あり。同上

第四章

○人の心を知りて後。交る
處。知らば。志て。交まらば。悔
ることあり。大和俗訓
○人ふ交るふは。厚きを本
と。厚しとい。人を責めぬ。

口業論 卷二 七風社藏

して。我を責むる也。同上

○己を責むれば。身脩り。人
我責免ざれば。恨を招くこ

とあり。同上

○他人の長短を論ぜんと
欲せば。先づ自己れ長短如

何を顧よ。願體集

○善人を見て。之小效ひ。不
善人を見て。之を改む。善と
不善と。皆吾師あり。傳家寶

○人禮を失ふも。咎む處有
らば。禮を知らざるの人の

狂人小同和

訓俗

○凡、人小對せ
バ、我、可、位、と、年
と、を、り、へ、り、ま。
又、對、せ、る、人、の

貝原先生



位と年とを、知り、其、宜、ま、さ、小
り、あ、ふ、ハ、禮、也。同上
○人、を、敬、ひ、て、節、又、過、よ、る
ハ、其、過、大、あ、ら、ば、我、可、位、よ
り、傲、ま、る、ハ、其、過、大、あ、り。同上

第五章

新清傳集註
○世又虚言多し。虚言を信
じて。人ふ語まば。吾も亦虚
言の責を免れぬ。大和俗訓
○君子ハ。人の善を揚げて。
人の悪を隠し。人の長を
所を取り。短き所を言ひぬ。

同上

○人の過ハ。吾が心ふ之を
知るを。妄りふ口より出ぬ。
可らぬ。同上
○人を誹るハ不仁あり。且
吾ふ於て益あり。人もし之

を聞るバ甚ど害あり。同上

○人を誚るハ第一の輕薄

あり。唯徳を失ふのみあら

バ亦我の身を失ふ。紳 埡

○郷里人物の長短を論じ

鄙俚無益の談を為すこと

勿き。養正 遺規

○凡人と語るじ彼をして

其所長を説くむべし。我

小於て益あり。佐藤一 齋語

第六章

○朝と道を聞けむ。夕小死

すとも可あり。孔子語

○玉琢らざれば器を成さ

べ。人學ばざれば道を知ら

べ。禮記

○志ある者ハ事竟ニ成る。

後漢光武帝語

○志を立つるの功も耻を

知るを以て要と_{佐藤一}に。齊語

○千里の路も一歩より始

む。志を立て、道を學ぶ。

遂小遠大至る_{大和俗訓}。

○萬の事初め、慎れば後

又功あり。學問は於て尤然りと云。同上

○書を觀ること一卷あま
バ。一卷の益あり。書を觀る
こと一日あまバ。一日の益
あり。明倪文節語

○學ぶ者ハ。必ず師を求む。
師を求むること慎まげら
べ。のらば。宋程伊川語

○道を教ふるの師も其恩
尤重し。君父と同しく貴ぶ
應し。初學訓

○技藝の師も亦我小恩あり。敬重せざふべからば。同上

○良田萬頃も。一藝の身小在るゝ如らば。願體集

第七章

○朝早く起くるハ家の榮

ゆる兆あり。晩く起くるハ家此衰ふる基あり。

大和俗訓

○一日の飯を喫せば。一日の



程伊川先生

口葉角身川 卷一 十一 風和齋林

飯錢を得るべきを計る。虚しく費はこと勿き。

願體集

○家を保つ。の道ハ。勤と儉と小あり。勤儉をまば。財を失はば。能く家を保つ。虚し。

貝原家道訓

○勤儉の工夫ハ。忍小あり。忍ハ耐ふる。あり。勞苦又耐つて克く勤め。私慾を制し。儉約を行ふ。虚し。同上。
○勞苦を樂之。本業を營め

バ。其後衣食のからば餘り

あり。明倪正
父語

○口腹を縦いまゝよし。逸
樂を事とせきバ。其後衣食
必足らば。同上

第八章

○過てハ改むる小憚ること

と勿き。孔子語

○過て改めざる是を過と

謂ふ。同上

○小人の過や必を文ざる。

子貢語

○人誰り過ありん。過て能く改めば善これより大あるハあし。左傳

○人其過を知らざるを患ふ。既よ之を知り改むること能ハば是勇あまき也。唐韓退之語

○過を改むるの人ハ天氣の新小晴るゝお如し。我自ら快し。人之を見るも亦喜ぶべし。明陸桴亭語

仙洲均書

和漢脩身訓卷二終

和漢脩身訓 卷二 終

水原修身詩 卷二 十九 光緒二十九年

明治十五年三月廿八日板權免許
同年五月四日出版
同年九月十八日再版御届

著者出板人

發兌人

東京府士族

光風社長

龜谷

東京神田區金澤町十一番地

大坂北久太郎町

柳原喜兵衛

同備後町丁目

梅原龜七

同本町四丁目

岡島真七

同南本町

中辺堂支店

東京馬喰町

石川治兵衛

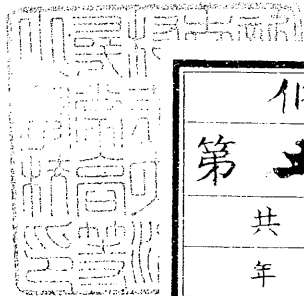
定價七錢

稟准

東京炎風社

明治十四年之冬以
複製本以此紙為限

修



| |
|----------|
| 修 |
| 第 五 號 |
| 共 拾 冊 |
| 年 月 日 備付 |

3

共
拾

| |
|-------|
| K1161 |
| 190. |
| 3 |

龜谷
行著
和漢脩身訓
三